



六花

2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

9月号

く 沓脱の下駄に積もれる稲挨
が 瓦斯のもう充ち来るころか威銃
つ 月の稲我を囲みて静かなり
ば バスを待つ黄金の稲の風の中
か 刈り取れる稲を束ねて子に放る
り 隣人に茶をすすめらる夜庭かな
に 日本酒の契約幟稲の花

な 夏終る気配さらさらばつたんこ
り 力士来る櫓太鼓や青田風
て 掌に赤米粃を診てゐたる
い 稲こきの捻りを上ぐる埃かな
で 出来秋や牛を手綱に腰を下ろす
に 煮染揚やまもりにして秋収
た 垂れ穂から虫飛び立つてもどりけり

せつかしゅう
雪華抄

破扇

ことり

く 暗がりにきらきらと虫鳴きにけり
が がま口を夏負の手で開けにけり
つ 築山の軽く見えたる残暑かな
ば ばつさりと影にも裂け目破芭蕉
か 観音の顔の灼けぬる残暑かな
り 両の手を包み零るる清水かな

に 人形の唇引き締まる夜の秋

な 夏瘦の肌に添ひくる絹の夜着

り 龍胆の重たき色を疎みけり

て てのひらをくすぐり逃ぐる蛸蚪の足

い 稲光雲に籠もりてゐたりけり

で 伝票を繰る手に秋の暑さかな

に 丹の橋にしたたかに降る秋日かな

夏至の日や光みなぎるままに落つ 久永つう

げしのひやひかりみなぎるままにおつ ひさなが つう

青田風もらふ心地に夕涼み

湯上がりの素足に下駄の涼しかり

露の葉の露さざめけるあしたかな

波しづき海に遊べる夏日かな

夏至は二十四節気の一つで太陽の黄経が九十度に達する時。北半球の昼が最も長く夜が最も短い。「日や」というのは日にちではなく太陽。強烈に輝く太陽が沈む光景を強調するため「光みなぎるままに」と言った。その日没は天も地も溶鉱炉のようになってしまう。また太陽が沈んだからといって、即涼しくなるのではなく、余光の強い熱波が降り注いで人々を悩ますのである。とくに瀬戸内では夕方風が死んだように止み、しのぎがたい湿りを帯びる。いわゆる夕凧で蒸し風呂状態。夏特有の当たり前な落日の光景であるが、日没を炎天下よりも暑そうに思わせた。

羽拔鶏

笹村 政子

ほぐしつつ補ふ御田の余苗
早乙女の足で均して田を上げる
寄せ墓や隙間のあらば蟻の道
牛蛙とび込む水の凹みけり
羽ばたきて砂をけちらす羽拔鶏

雫

梶浦玲良子

地下水の耳立ててをり苺狩
空蝉のこゑにふりむく轍かな
青すすきゆふぐれ熱き雲を追ひ
涸滝に希望大学聞かれけり
夕虹の雫が背なに童歌

せつじゆしゆう
雪樹集

夜明けの蝉

筒井八重子

冷やし桃友に会ふのも久しぶり
いつまでも露草蕾たもちけり
夕暮れの団扇片手に唄愉し
大空の星輝きて夏に入る
ひとしきり夜明けの蝉の鳴きにけり

玉

出口

誠

水無月の石灯籠の濡れてをり
葉の上の玉となりゆく梅雨かな
スカートを汽車に煽らる夏帽子
七変化緑がかりし白で咲く
水芭蕉白が黄色をくるみけり

蛍雪譚 六甲

豆飯や青竹踏みの五百回

松本文一郎

青竹を踏むと足裏のツボが刺激されて健康維持や疲労回復に役立つとされている。この句のように五百回も踏めばツボの刺激だけではなく、これはもう健康歩行。室内にいても充分運動をしているのである。現代では健康器具の通信販売が盛んだが、購入したら気が済んで、部屋の片隅に放置される。しかし青竹は経済的にも地球環境にもやさしい器具。元氣よく青竹を踏んでいたら、台所から豆ご飯の匂いが漂ってきた。このようにまめで健康的な暮らしをしたら百八十歳以上は生きられるかも。戸籍上は…。

子が虹を欲しいというから肩車

貝森 光洋

この作品で思い起こすのは「あの月をとつてくれると泣子哉 一茶」の句。手が届くはずのない「月をとつてくれ」と泣いてねだった子に対して一茶はどのような行動をとったかは何も言っていないが、意外なことを言う子どもにうろたえている親の姿が想像される。貝森さんの句は虹に手が届くはずもないのに肩車をして少しでも虹に近づけたら手が届くかも知れないと、行動を起こし

た親の冗談とも本気とも取れないばかりか、子どもの方が「取れないだろう！」と突っ込みを入れて、現代っ子のあきれている姿が浮かぶ。

一茶は月をとってくれと意外なことを言っ「せがむ子」を中心に句にした先駆的手柄があり、一茶の作品を承知で本句取りして、意外な行動をとる「親」の方を中心に取り上げているのが可笑しい。

(以下略)

六花集 会員作品

日々草見ゆるかぎりは手を振つて
辣蕪を漬けることさへ生き甲斐に
花山葵たどり着きたる隠れ滝
渡るたび橋細くなり河鹿笛
明易や差し伸べし手の空つかみ

平居 濤子

風鈴の帯に滲みし墨の痕
麦秋や白衣を着たる研修医
ひよんの木の高みに夏の雲流る
葉桜や白壁黒き施錠して
蔵跡や黴の匂ひを残したる

五ヶ瀬川流一